

アフター 性活は朝食のあとで

「……おはよう」

寝ぼけた頭で、当たり前となった挨拶を口にする。この言葉が、僕たちの日常の始まり。

「おはよう」

朝から最高級の微笑みが返される。僕の恋人——いや、妻のとびきりの笑顔だった。

「そういえば、香子さんは？」

「締め切り直前らしいわよ」

新居を考えたのだけど、部屋一つ余ってるし、一人は寂しくなるからウチ使えと言ってくれたので、咲ノ宮家に住まわせてもらっている。

「ねえ？ ちょっといい？」

「どうしたの？」

「この世界にサキュバスっていると思う？」

相変わらず瑠瀬の興味関心は変わっていなくて、サキュバス好き娘のままだ。

「どうだろうなあ……？ 瑠瀬は？」

「いるに決まってるじゃない！」

本物を見たことがあるような口調に、呆気にとられてしまう。

「って、私はいいのよ。あなたはどうかなの？」

なんでこんな話を振ってきたのか、心当たりがある。

妖しさにゆがんだ瞳が、視線の圧力が、精神をすり減らしていく。

「……いるんじゃないかな」

「へえ……。だから、わざわざこんなところまで行ったのかしら？」

その手には、クラブ・サキュバスと記されたカードが握られていた。いわゆる風俗店の会員証だ。

「これ、あなたの名前が書いてあるし、何度も使っているようだけど」

言い逃れできない——許してください、そう必死に頭を下げる。初めて話したときと同じシチュエーションに、どこか懐かしさを覚えてしまう。

「あなたがそんな人だったのはわかってるし、サキュバスって単語に心躍るのは仕方ないわよ。私だってそうだし。……で、どうだったの？ どんなことされた？ 格好

は？ 店の様子は？ 詳しく聞かせて！」

いきなりスイッチが入るのにも、もう慣れた。

今のテンションから、恐ろしいことは起こらなそうで一安心。

内装を伝えようとするが、緊張していたせいなのか、まったく思い出せない。プレイも、ベッドで寝かされたところまでしか記憶にない。

「うーん。実際に見てみないと難しいものがあるわね」

「だったら、取材で行って見たらどう？ たぶん大丈夫じゃないかな」

「その手があったわね！ そうと決まれば、早い内に聞きに行かなきゃ！」

喜んでくれているようで何より。これを通して、サキュバス風俗店の作品ができたら、僕だって大喜びだ。瑠瀬の同人作品は、相変わらずめっちゃシコなんだから。

「それじゃあ、朝ご飯にし……」

「まだ話は終わってないわよ」

背筋が凍るような音声で、そう告げられる。やっぱりそうなるのか……。

「私じゃ満足でなくなっただ？」

「いや、そんなことは……」

「風俗はダメって言ったでしょ。約束を破る悪い人にはお仕置きが必要ね。あなたは私専用のものだって、徹底的に教え込んであげる。前みたいに、気絶するまでしないから安心して」

「うう……」

恐怖で体が震える。今夜起こるであろう地獄の責めに、絶望に染まった声をあげてしまう。だが、それを期待している自分もいた。

「どんなことされたい？ リクエストがないなら、やってみたいのがあるんだけど」

「……優しいのがいい」

「なによ、いつも優しくしてるじゃない」

「いつも？」

「ふーん、今日は厳しくしようかしら？」

「ごめんなさい、瑠瀬の愛は優しいです」

「ん、わかればよろしい」

トントンと階段を下りる音が聞こえてくる。

「瑠瀬、やるのは構わんが、黙ってやってくれよ。明日締め切りだから、邪魔されちゃ

たまらん」

香子さんが、リビングに降りてきた。娘の暴走を止めず、追加注文までしてきたんだけど。そして、元気の源である栄養ドリンクを数本手に取って、また二階に上がるうとしている。

「……じゃあ、あれに決まりね」

悪意に満ちた笑顔が怖い。怖すぎる。

一体何をされるんだ。猿ぐつわでもはめられるのか。というか、いじめられるのは、すでに確定しているみたいだ。

「いや、えっと……もつと体を大事にした方が……」

なんとか制止を試みる。絞り出した理由はもつともなもので、溜瀨の体に負担をかけるのは申し訳ない。

「心配ありがとう。……でも、別にセックスするわけじゃないんだし、大丈夫よ」

やっぱり、彼女には逆らえないんだなあ。

「あ、そうそう、晩飯前になったら呼んでくれ」

脇から口を挟まれる。もしかして、夜まで仕事をするつもりなのかな。

「わかったわ」

「頑張ってください」

無理やり会話を中断させられたことで、一緒に朝ご飯を食べることにした。僕にだけ、鉄分や亜鉛を多く接種できる料理を出しているんだけど……気のせいかな。

「夕食は、奮発してうなぎにしたいんだけどいい？　ほら、そういう日でしょ。あれ、違ったかしら？　まあ、いいでしょ？」

「う、うん……」

絶対わざとだ。精力をつけさせて、愉しむつもりだ。そんな手を使ってくる瑠瀬が、恐ろしいけれど可愛くも思う。

「それじゃあ、いただきます！」

「いただきます！」

香子さんに見守られながら、二人——いや、三人で、今日もそしてこれからも幸せに過ごしていく。